

# ともしに新聞



第6号

二〇二三年(令和五年)一月

鞆の浦学園 学園会

## 学園会「新」メンバー紹介

鞆のすごい人やすごいところを「ともし新聞」で紹介したい!

みんなが、「すごい!」「知らなかった!」と思うような内容を伝えていきます!

地域の方など、たくさんの方に読んでもらえるようにしたい!

「ともし新聞」を通して、地域の方達との関わりを大切にしていきたい!



## 学園会



鞆のことを知ってもらうために、地域の方達と交流できるように頑張りたい!

これから私達は!

「ともし新聞」をもとに鞆を紹介し、他の地域の方とも交流できるような新聞を作りたい!

「ともし新聞」を通して、お互いのことを分かり合えるようにしたい!

新聞作りを通して、地域の方や他学年の人と交流していきたい!

## 「絆」リレー

NO6

卒業証書授与式まで、一ヶ月あまりとなりました。卒業までに聞いておきたいことがあり、学園会の先輩でもある九年生の古山朝子さんと岡崎偉楓さんにお話をうかがいました。

まず最初に、九年間を振り返って心に残っていることを聞きました。すると、今年度の「運動会」だと教えていただきました。理由は、それまでの先輩たちが考えたものもよかったが、一から自分で考えて創っていくことが楽しかったからだということでした。一つ一つ決めたことが実現していく楽しさを、笑顔いっぱい話してくださいました。

次に、入試を控えた今、感じていること、私達へのアドバイスを聞きました。すると、「苦手なこともあるかもしれないけれど、自分ができる限りのことをしていたら、それは自信につながる!」「自分の得意なこと、好きな教科を頑張っておくと、それが大きな武器になる!」と、力強く伝えてくださいました。最後に、鞆の浦学園のみなさんにメッセージです。「今を大事にして、楽しんでほしい!シンプルに、楽しむ!」「大きな夢をもって!将来の自分をイメージする!」

私は、取材を通して、何かを一から作り上げることは、すごく心に残ることなんだなと思いました。そして、二年後の入試に向けて、自分の武器は何かを見つめ直し、将来をイメージしてみようかなと思いました。

(七年 藤本 望奈)

私が二人にインタビューをして思った事は、やっぱり、この学園の先輩達は、すごく接しやすく頼りになるなということです。だから、私もそんな先輩達のようにになりたいと思いました。

(七年 園田 真生)



## ありがとうを伝えたい

NO6

今回、「ありがとう」が伝えなかったのは、鞆こども園の先生方です。伝えに行くと、片岡孝子先生がお話を聞かせてくださいました。鞆こども園は、学園に入学する前に楽しく過ごしていた場所です。その鞆こども園の園児と、学園の児童生徒がいろいろな交流をしているのをご存じですか?最近では、一緒に避難訓練をして、避難の仕方をもとに学びました。また、1/2成人式も開催して下さり年長児さんと四年生が交流しました。

さらに、毎年、チャレンジウィークでお世話になっていますが、今年度は十名の生徒を受け入れてくださいました。そこで、ぼくも園の子ども達と関わってたくさん経験をし、難しさを感じました。どうして十名もの生徒を受け入れてくださるのか、理由をたずねてみました。すると、「小さい子ども達は、言葉で伝えることが難しい。だからこそ、想像力を働かせること、感受性を高めることが必要。自分以外の人の気持ちにどう寄り添えるかが大切。そのことを、チャレンジウィークで学んでほしい。」と伝えてくださいました。それを聞き、ぼくが感じた難しさは大事な感覚だったことに気がきました。

そして、鞆には「チヨウサイ」という祭りがありますが、この祭りをもっと多くの人達、子ども達に広めたいという思いから、鞆こども園でも毎年行っているそうです。その中で、片岡先生が大切にされていることは、「地域が同じとか違うとかではなく、今一緒にいるみんなが仲良くすること」だそうです。「それが、鞆の浦学園でできている。運動会などの行事でも、学年の壁を超え、みんなが一丸となって力を合わせ、楽しく活動しているのが伝わってくる。」と、言っていたいただきました。今、学園会が来年度の運動会に向けて内容を考え、企画している真最中です。よりよいものを創ろうと、白熱した議論が行われています。



片岡先生とお話する中で、たくさん子ども達を思う気持ち、すごく伝わってきました。その中で一番印象に残っているのは、「子どもにもさせるのではなく、させてもらっている」という言葉です。「先生達は、毎日子ども達に愛情を注いでいるが、それ以上に、子ども達から、毎日元気と喜びをもらっている。」と、ぼく達がこども園に通っていた頃と変わらない優しい満面の笑みを浮かべながら話してくださいました。ぼくは、これから、いろいろなことをやっていく上で、「やらされるのではなく、やらせてもらっている」と、感謝の気持ちをもちたいと思いました。(八年 赤松 翔太)



